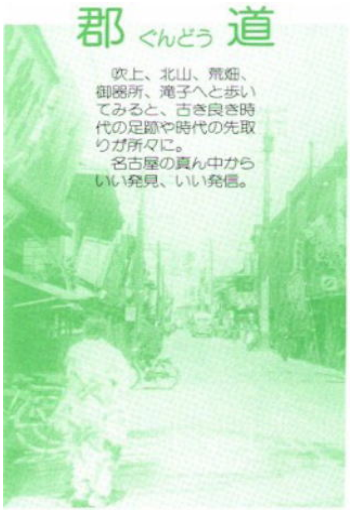
「郡道」をゆく

作家・司馬遼太郎の紀行シリーズに「街道をゆく」がある。「街道」ではなく、「郡道」をゆくと題してレポートしたい。



写真は名古屋市昭和区役所まちづくり推進室のサイト掲載による。このマップは地元ボランティアの人が作成したもので、昭和区役所で手に入れ学生に配ったことがある。写真をみて昔のことを思い出した。

いま、なぜ郡道（ぐんどう）なのか。それにはちょっとした「わけ」がある。それを説明する前に、郡道について説明しておこう。

先のサイトによれば、郡道とは「昭和区の西部を南北に縦断し、南端は東海道の呼続（南区）、北端は飯田街道の古井坂（千種区）に通じている道。完成は明治 42 年(1909)で、大正 12 年(1923)の「愛知郡誌」によれば当時郡内に 49 本の郡道が通っていたが、この道だけが今でも地域の人々から「郡道」と呼ばれている。「八高」（旧制第八高等学校・現名古屋大学、現在は名古屋市立大学滝子キャンパス）とともに発展し、戦前戦後は市バスも走る重要な幹線道路だったが、市電を通すには道幅が狭すぎたため、主要な交通網から取り残されてしまった。

昭和区内の郡道については、滝子キャンパスで教えていた頃に多くの思い出がある。なんと言っても、社会調査実習で学生と滝子商店街を調査した時のことが忘れられない。旧制八高の「香り」がわずかに残る滝子商店街は、まさに郡道そのものだ。昔は八高の学生らで賑わう商店街であったが、いまは空き店舗が増えて寂しくなった。学生の調査した成果が、「商店街をどうしょうてんがい」と題して地元ケーブルテレビで放映されたことがある。このテレビ録画は昨年 2 月 22 日の「最終講義」でも流した。私の講義よりも映像のほうが「エイぞ―」という感想を耳にして、複雑な思いをしたものだ。

郡道でもう一つ忘れられないのが、名工大の非常勤講師を勤めていた頃である。私の苦手な理系、工学部の学生に「都市問題論」という講義を数年にわたり講義した。いつもの「調子」で講義したが、私のユニークな？話に関心を持った学生も多かったようだ。私の講義を聴いて、名工大を卒業後に名市大人文社会学部に編入して、私のゼミに来てくれた「珍しい」優秀な学生もいた。名工大の講義の帰りには、郡道を通って滝子キャンパスまで長い道のりを歩いた。この道は写真のように、昔の風情を残している。郡道としてよく紹介されるは、名工大近くの昭和区北山から荒畑のあたりだ。

さて今回、郡道を取りあげたのは瑞穂区、それも京ちゃんとの出会い、私の腰痛に関係している。私の気持ちが「ようつう」じるか、レポートの続きをお楽しみに。。

(2015 年 3 月 18 日)